

無花果(イチジク)の原産地と栽培の沿革、品種分類

2017/01/31 (編集)

山下重良編

原産地と栽培の沿革	<p>・無花果は桑科(Moraceae)・無花果属(Ficus)の植物で、英名の fig はラテン語の ficus に由来する。1250(建長 2)年頃、figges、または fegges の名で ポルトガル、又は スペインから英国に輸入された。現在、地中海沿岸の南欧諸国に至る所で野生化した無花果をみる。イタリアでは野生無花果を profico, fico selvago, caprificus 等の名で呼んでいる。caprificus は英語の capri fig である。カプリ(capri)は、capre(山羊)から由来する。果樹園芸界で capri Fig と称する一群の品種は、Smyrna Fig の授粉樹として必要欠くべからざるものとなっているが、これは多数の栽培品種の原生種に最も近縁なもので、栽培品種の先祖型と認められる。植物学上、無花果属(Ficus LINN.)の植物は 600 以上にのぼるが、果樹として栽培されているものは Ficus Carica LINN.、即ちイチジクのみである。その原生地については、多少の異説があるが、G.EISEN 氏の所説によれば、アラビア南部の肥沃地帯に原生したもので、太古時代に北方に伝播して、シリア、小アジア地方に渡ったと云う。無花果が地中海沿岸諸国に伝搬したのは、フェニキヤ人、及びギリシャ人の航商、及び移民による。特に、フェニキヤ人は BC14 世紀末頃に、サイプレス・ローデス・シシリー・コルシカ・マルタ等の諸島、及び南欧諸国と交通を開始していた。この時代から、無花果は東部から西部に伝搬し、地中海沿岸諸国に広く分布するようになった。無花果の名が詩文に現れるのは BC8 世紀に ARCHILOCHUS が、その栽培を書いたのに始まる。イタリアにはギリシャより渡来したもので、プリネ(プリニウス=23-79 年)の時代に既に南北に普及していた。アリストートルス(BC384-332 年)は、無花果に関する有名な記文として、結実するには特殊な昆虫の授粉媒介を要すると述べ、テオフラスタスは授粉の状態を記述している。エジプトは原産地ではないが、第 12 王朝時代(BC2400-2200 年)の墓碑の刻画として最も多いものは葡萄と無花果である。ペルシャ・アフガニスタン地方にも古代から栽培されていたことは明らかである[果樹園芸学上巻 33]。</p> <p>・中国に於ける沿革は無花果を掲載した最古の文献は、段成式の[西陽雜俎(860 年)]と思う。その内容は、【阿駟】波斯國(中国の六朝・隋・唐時代におけるササン朝ペルシア)と呼んで阿駟<small>アジツ</small>と為し、拂林國(シリア國)呼んで底珎<small>テイチン</small>(或いは梢に作る)と為す。樹長丈四~五丈、枝葉繁茂し、葉に五出あり、稗麻(蓖麻=トウゴマ)に似たり、花無くして實あり、實は赤色にして稗子(稗柿=アブラガキ)に類し、味は甘柿に似て一月にして熟す[西陽雜俎/本衛版/果樹園芸学上巻 33]。ラウファー氏によれば、阿駟・阿駟・阿駟は共に古いペルシャ語に由来し、無花果を意味すると云う。底珎・底稱、又は底珍(本草綱目)は、アラビア・フォイネシア・ヘブリウ語の音韻に宛てた漢字である。ラウファー氏によれば、無花果は唐時代(618-906 年)以前には中国に渡来して居らぬと云う。渡来年代は不明であるが、印度、又はペルシャ地方から伝搬したと思われる。無花果と云う名称は、14 世紀後半の周定王の[救荒本草]巻十、木部に無花果と載っている。その記文に、【無花果】「山野の中に生ず、今は人家園圃の中にも亦栽ゆ。葉の形は葡萄葉に似て、頗る長くして硬し。面厚くして梢三叉を作す。枝葉の間に果を生ず。初めは即ち青くして小、熟すれば大にして状、李子の如し。色は紫茄の包に似て味甘し」とある。その後、汪穎著:食物本草、16 世紀前半期、李時珍著:本草綱目以下の文献に、実果類として無花果が掲載されている。こうしたことから、14 世紀前半期には中国で栽培されていたもので、13 世紀頃に中国に渡来したと思われる。現在、中国には在来の一品種が残っていて、葉に欠刻少なく、我が国の在来種に類似している。北京地方では、鉢または樽に植えて冬の間、保護している。江蘇省以南には、最近の輸入品種と共に広く栽培されている[果樹園芸学上巻 33]。</p> <p>・日本では、「大和本草」(宝永 5(1708)年成立)に次の二つの記文がある。【無花果】「イチジク、タウガキ、寛永(1624-1643)年中、西南洋の種を得て長崎にう(植)ふ、今諸国に之有り。葉は桐に似たり、花無くして實あり。異物なり(中略)。日本にもとよりイチジクと云う物、別にあり、後にあらはすイチジクに似たる故に、無花果をもイチジクと云う」と。また、「救荒本草」(初刻本/永楽四(明朝成祖/永楽帝の代の年号 1406)年)に、「無花果の葉の煎湯治心痛甚だ効あり、このこと本草には不載。【イチジク】「無花果をもイチジクと云う、それには非ず。葉は木犀に似てうすく、冬落ちて恰も無花果の如し。味甘し、小児好んで食す。實青き時、割れば白汁あり。村落林木ある所にあり。村民その葉をとり、飯上に置き蒸して食す。味よし、無花果は近世</p>
-----------	---

わたる。イチジクに似たる故にその名をかりて、無花果をもイチジクと云う」と。これはイヌビワで、牧野富太郎博士によれば、「イヌビワ一名イタブ、コイチジク、古名にイチジク」とある[果樹園芸学上巻 33]。・(注)和歌山県那賀郡調月村(現/紀の川市桃山町調月)では、編者の子供の頃「イノブ」と呼んだ。あまり旨くもないが、熟して柔らかくなると食べることができた[編者]。

・日本には徳川時代に既に 2 品種の無花果が栽培されていた。「和漢三才図会:正徳 2(1712)年」・「本草綱目啓蒙=享和 2(1802)年成立、翌 3 年刊」には、紫果品と白果品を記載し、「藝州(現/広島県)はその名産地なり」としている。「舶来果樹要覧=明治 17(1884)年刊」には、「Large White Genoa」・「Black Fig」の他に原名不明の早熟種と黄熟種各 1 品種が記載されている。明治時代に最も広く普及したのは、「White Genoa」であった。・明治終わりから大正時代に多数の品種が輸入され、「White Adriatic」・「Brown Turkey」・「California Black」・「Sanpedro White」・「Sanpedro Black」・「Violet Dauphine」・「Celeste Blue」・「White Ischia」・「Black Ischia」等で、その大部分は米国加州から輸入された。在来種は「蓬来柿」の名で栽培され、広島県が最も盛んで現在も無花果の老木が多い。Smyrna 種は輸入されたが、Capri 種及び授粉用の昆虫を輸入しなかったので普及せず終わった。現在、普遍的に栽培されている品種は、「梶井ドーフィン」と称する[果樹園芸学上巻 33]。・(注)梶井ドーフィン、平成の今も無花果の経済品種として多くの産地で栽培されている[編者]。

・ S.H.SHINN 氏は、BAILEY,L.H.:syclopedia of American Horticulture(1909)に、栽培品種の分類を次のようにあげている。(1)Ficus Carica LINN.var.sylvestris SHINN。小アジア及びアラビア地方の野生種で、一般に Caprifig と呼ばれ、栽培品種の先祖型とみられるものである。微細な昆虫(Blastophga grossorum GRAV.)が花托内に生息し、古来スミルナ種の授粉に利用されているので有名である。(2)F.Carica LINN.var.smyrnica SHINN。Smyrna Fig と呼ばれる品種群を一括したものである。古来、小アジアのスミルナ(Smyrna =トルコの旧名)地方に栽培され、乾果として最も優秀な品質をもつ。花托内に雌花をもつのみで、結実にはカプリ種の授粉を条件とする。栽培はスミルナ地方に限定されていたが、前世紀末頃から米国にて栽培に成功して乾果の一大産業を形成した。(3)F.Crica LINN.var hortensis SHINN。一般の栽培品種を総括したもので、受精せずに果実が発育する単為結実するものが多く、種子が発育しても胚が無いので発芽しない。(4)F.Carica LINN.var.intermedia SHINN。第 1 期果、即ちハナイチジクは前者同様で在るが、第 2 期果はスミルナと同様に結実には受精が必要である。Sanpedro 群の品種はこれに属す。結実習性はスミルナ系と前者との中間にある爲、intermedia の変種名を与えられた。無花果は一般に小喬木と考えられてきたが、加州サクラメント市の郊外に、地上 3 尺位の幹周 12 尺(約 3.6 尺)、高さ 60 尺(18.2 尺)以上に達した Mission の樹がある。Wicson, E. J.の[California Fruits(1921)]には、加州サクラメントに無花果の巨木を記述し、樹高 60 尺(尺は約 30.48 cm で 18.3 尺)、枝張り 77 呎(23.5 尺)、幹周 12 呎 2 吋とある。また、Alameda County には、樹齢 125 年、幹周 17 呎に達する樹ありと云う。これら巨木は、何れも Mission で、成熟期には落果で地面を覆われ、果実を踏まずに歩行すること困難と云う[果樹園芸学上巻 33]。

・無花果は温帯中南部以南に分布するが、我が国に於ける北限は青森県西津軽郡深浦町及び岩崎村の日本海沿岸地帯とみられる。無花果の在来品種、及び White Genoa が完全に成木し年々成熟果を収めている。表日本では仙台市の宅地に栽培されているホワイトゼノアが 1 期果、2 期果を完全に収穫しているが、岩手県内では果樹としての栽培は困難である。無花果の耐寒性については詳細な研究はないが、I.J.CONDIT 氏(1933 年)は、米国に於ける経験から、華氏 15°(-9.44 °C)まで低温に耐えられると述べている[果樹園芸学上巻 33]。

果器官と結果習性

・無花果は果実としての食用部は、花托の発達した部分である。花托の内壁に多数の花を着生して一種の花序を形成する。これを隠(陰)頭花序と云う。桑は、これと反対に花序は中空からず、花托の外壁に多数の花を着生するが、果実としての主要部は無花果と同様に花托である。無花果は先天的特性として、花は雄花と雌花とに分化している。然し、多数の品種の中には雄花は退化して花粉生成機能を失ったものが少なくない。雌花の形態を備えるものには三様の別がある。第 1 は完全な雌花であって、授粉によって受精し、完全な種子を形成する。第 2 は虫瘻花と称するもので、雌花の変態である。花柱短く柱頭の発育不完全にして、粘液を分泌しない。授粉しても花粉管が発育しない。胚の発育も不完全で受精機能を欠如して

いる。只^{ただ}ブラストファエガ虫はこれに産卵し孵化して^{ちゆうえい}虫癭を形成する。第 3 に属すものは、**中性花**と称するもので、花柱の長さは前兩者の中間、柱頭及び胚が本来の機能を消失していることは虫癭花と同様であるが、虫癭形成の機能を欠如している[果樹園芸学上巻 33]。

・**結果習性**は、新梢の基部 3 葉目から各節の葉腋に花托を着生する。栽培地の気温にもよるが、果実は基部から順次成熟し、晩秋に至り上部に着生した一部の果実は発育完了せず終わるが、先端部の小豆大の花托は越冬して翌春新梢の発育と共に、亦発育して 6-7 月に成熟する。これを**花イチジク**、又は**夏イチジク**(夏果)と呼び、園芸學上は**第 1 期果**と呼ぶ。これに対して、新梢に着生するものを**秋イチジク**(秋果)、又は**第 2 期果**と名付ける。1 期果は、2 期果に比べて著しく大きくなるのみならず、果形にも相違がある。普通、2 期果を収穫の主要部とする。品種によっては、2 期果の幼果は晩秋に脱落せず、発育を継続して越冬し、1 期果に先んじて成熟する。これを**第 3 期果**と云う。1 期果と 3 期果は 2 年子で、兩者の間に鮮明な区別がある。3 期果を得られるものは至って少ない(以下略)[果樹園芸学上巻 33]。

・エイシン(EISEN,G.)氏の分類を、花の性能と結実の関係でみると、(1)**Caprifig** :**カブリ種**は雄花・雌花及び虫癭花を具備する。雄花は花托内の上半分に、雌花と虫癭花は下半分に密生するが、雌花は数が至って少ない。1 期果を **Profichi**(プロヒッチ)と云い、雄花と虫癭花を着生するも、雄花を欠く 3 期果を **mammi**(マンミ)と云い、1 期果同様に雄花と虫癭花のみを持つ。完全な雌花を有するのは 2 期果のみである。これに反して虫癭花は各期の花托に存在する。要するに、カブリ種の花の主体は虫癭花と云っても過言ではない。**ブラストファエガ虫**はカブリ種の虫癭花に 1 個づつ産卵する。2 裂した柱頭を押し開き、短い花柱の内溝の基部に産卵し、産卵すると虫癭花は虫癭を形成する。柱頭基部は肥大し、胚囊の珠皮が硬化して^{ふか}孵化した幼虫を保護する状態に変形し、硬質の壁層によって被包される。産卵されない虫癭花は萎凋する。産卵後二ヶ月で成虫となり、虫癭の殻皮を破って花托内に出る。雄虫は無翅で、雌虫は有翅である。花托内で交尾して受精後、雌虫は花托の頂部開口から外に出て飛び回り、産卵する場所を求めて次期果の花托に入り、この際に翅を失う。産卵後、雌虫は果内で死滅する。雄虫も果内で死滅し、雌虫の死体と共に花托の組織細胞に吸収される。ブラストファエガ虫はカブリ種を授粉する経路をみると、3 期果のマンミから飛び出した雌虫は、1 期果のプロヒッチに侵入する。3 期果を出るときに虫体に多量の果粉を着けているが、1 期果には雌花が無いので授粉されない。1 期果から飛び出した雌虫は、多量の花粉をもって 2 期果に侵入、産卵する際に 2 期果の雌花に授粉する。雌花の数は少ないが、2 期果には完全な種子が出来るのはこの爲である。この授粉を特に「**capfication**」と云う。2 期果は雄花を欠くので、この果実から飛び出した雌虫は花粉を負はずして 3 期果に侵入し、孵化した幼虫は蛹で越冬して早春に成虫になり、雌虫は果外に出て 1 期果に侵入する。カブリ種の 1 期果、及び 3 期果は、受精と無関係に発育する。2 期果の雌花は受精を完了するが、その数は至って少なく虫癭花で充たされている。要するに虫癭を形成することは、カブリ種の果実を発育させる主因となる(後略)。以上の事実から、ブラストファエガ虫とカブリ無花果とは一種の共生関係にあるとみられる。(2)**Smyrna Fig** **スミルナ種**は、1 期果、及び 2 期果を着生する。共に完全な雌花をもつが、雄花及び虫癭果を欠く。雌花は受精して種子を作らねば果実の発育を遂げない、然し、自果に花粉を受ける以外に結実する道はない。スミルナ種の収穫の主体は 2 期果で、新梢の葉腋に着生する 2 期果の大部分は 6-7 月に 榛 大に生育する。この時期は雌花の受精期で、カブリ種の 1 期果より飛び出したブラストファエガ虫の雌虫はカブリ種の 2 期果の花托に侵入する。スミルナ種とカブリ種が混植されていれば、この昆虫は誤ってスミルナ種の花托に侵入する。スミルナ種は虫癭花がないので、一旦侵入した雌虫は産卵場所を求めて花托内で蠢動(うごめく)する間に虫体に附着した花粉が、雌花の柱頭に授粉され受精することになる。雌虫は花托内で死に、花托組織に吸収される。これが、**capfication** によってスミルナ種の結実を計る経路である。古来、小アジアスミルナ(トルコ)地方はスミルナ無花果の産地として有名である。スミルナ種は、カブリ種の混植によって初めて結実することは昔から認められていた(中略)。加州フレズノ地方では、スミルナ種の枝にカブリ種の 1 期果数個を入れた箱を吊して授粉を計っている(中略)。カブリ種の 1 果に約 600 のブラストファエガ虫が居るので、授粉用として、スミルナ種 100 本に対して 1 本又は 2 本のカブリ種を必要とする。カブリ種を栽植する場合は、なるべく陰地を選ぶ必要がある。従って、スミルナ種と混植せずにカブリ種のみを集団栽植地をスミルナ果樹園に接して設定するのが有利である。(3)**Mission Fig** (**普通栽培種**)は、1 期果と 2 期果を生産する。1 期果は生産が少なく風味も劣るが、2

	<p>期果に比べて著しく大果である。両者ともに授粉を必要としない。主に中性花と少数の雌花からなり、虫癭果と雄花を欠く。少数の雌花は人工授粉によって種子を形成するが、胚をもたないので発芽しない。一種の単為結果で、ミッションは加州の代表的品種である。(4)Sanpedro Fig は、1 期果に中性花をもつのみで、授粉せずに結実することは、ミッションと同様である。2 期果には完全な雌花をもつが、雄花がない爲に授粉出来ない。これにカブリ種の花粉を交配すると完全に結実する。Sanpedro White・Sanpedro Black・Gentile・Portuguese 等の品種はこれに属す。アイゼン氏は以上の 4 品種の他に、次のような品種群をあげている。(a)Adriatic Fig : 1 期果は授精を結実の必須条件とし、普通栽培では 1 期果は発育しないが、カブリ種の花粉を交配すると結実する。2 期果は授粉とは無関係に結実し、これが収穫の主体となる。White Adriatic は代表的品種である。(b) Cordelia Fig : 完全な雄花をもつ品種群で、その他はミッション群品種と同様である。多少の雌花をもつが、雌薬、雄薬の熟期が相違するので授精には無関係である。(c)Erinoocyce Fig : 1 期果に雄花及び虫癭花をもち、2 期果に雌花及び虫癭花をもつ。Erinoocyce は代表的品種であるが、カブリ種の 1 期果及び 2 期果と同様である。この品種の 1 期果は食用価値がない[果樹園芸学上巻 33]。</p>
<p>年代・年次</p>	<p>日本におけるイチジク栽培、品種の導入と栽培の歴史</p>
<p>寛永年間 (1624~1642) 蓬来柿</p>	<p>・無花果の在来品種「蓬来柿」は、古く寛永年間に存在が記されている[恩田鉄弥,浅見与七: 1935 年,重要果物原色図説,養賢堂発行,金戸橋夫/園芸学全編 128]。・在来種の「唐柿」(蓬来柿)は日本では歴史の古い品種であるが、来歴は明らかでなく、少なくとも 300 年以上前に渡来したと推察されている。果実は 60 ㍉前後、果形は楕円形、または短羊ナシ形で果頂はほぼ平ら果頸はほとんどなく、条線は明瞭、目(へそ)は小さく、鱗片は起立せず紅色である。(中略)収穫は秋果が主で、9 月上旬から 11 月降霜期まで採れ、豊産性である。蓬来柿は、寛永年間にポルトガル人によって中国のイチジクが持ち込まれたと言われ、全国に広がっていた。「蓬来柿」は江戸時代に中国から長崎に伝わったとされる。江戸時代には薬用植物として利用され、外国の柿のような果実ということから「蓬来柿」や「南蛮柿」「唐柿」などと呼ばれていた(後略)[園芸学大系,無花果・梅・杏・李編 114/園芸植物大辞典 103]・[旬の食材百科/蓬来柿]・[果物図鑑/イチジク]。</p>
<p>明治 7(1874)年</p>	<p>・七月、岡山県は、岡山区門田屋敷(現岡山市)の丹波、石津一森三氏の屋敷二反歩を借入れ、蔬菜果樹の試験場として「順致園」を設け、勸業寮から払下げのモモ・ブドウ・イチジクなどを試植した[塚本学:日本の果物受容史 110]。</p>
<p>明治 8(1875)年 清国より果樹苗木求む</p>	<p>・五月、清国(現/中国)より果樹苗木を求む[明治園芸史/果樹農業発達史 14]。・明治八年、政府は、武田昌次・岡毅・南部 陳・山口辰七郎・中相常利・満川成種、等を清国に遣わし農産物を調査し、兼て羊・驢(驢馬)及び穀菜果樹を購入せしむ。この際に上海水蜜桃・天津水蜜桃・蟠桃の他に、無名の油桃 1 品種・蘋果(中国苹果)・櫻桃(支那櫻桃)・大鴨梨(鴨梨)・水晶石榴・杏(杏子:品種名なし)・大白葡萄・大紅葡萄、等を輸入したことになる[大日本史/果樹園芸学上巻 33]。</p> <p>・十一月二十日、(千葉県は果樹の試作希望者を募る県の告示)出す「勸業寮ニ於テ接挿木分賦培養有志ノ者、出願方ヲ達ス。勸業寮出張所ニ於テ当春接挿候菓木、別紙品数今般当県管下へ可及分賦候間、有志ノ輩有之候ハハ此願書可差出、尤苗木ハ下切相成候ニ付、運賃其他培養等之費用ハ一切給与不到旨、同寮ヨリ通達有之候条得其意、培養有志之者ハ品数等書載、早々扱所ヨリ区内へ無洩相達、毎該区願書取纏、十二月十五日迄ニ企望ノ者有無トモ可申出候、若日限後願書差出候儀ハ採用不相成候、此段相達候事。但品数多寡有之ニ付、願書次第ヲ以可為分賦候ニ付テハ願書落手ノ順ニ番号記載可差出候、□ハ運賃其他費用計算ノ上、苗木渡ノ節可相達候間、速ニ上納可到儀ト心得事。明治八年十一月二十日。千葉県令/柴原 和。明治八年接挿候(接木した)米国产菓樹。一、苹果 アップル七十五本。一、梨 ペイル六十本。一、桃 ピーチ二十</p>

無花果(イチジク)

	<p>五本。一、李 プロム三十本。一、杏 エプリコート五本。一、^{は たんきよ}巴旦杏アーモンド 十本。一、葡萄 グレープ 五本。一、無花果 ヒツグ五本。一、フサスグリ カレンツ五本。一、スグリ イースベルクト六十本。一、^{不 明}□□ クイーンズ一本。一、桜桃 チェルリー六十五本。計拾貳種。本数三百四十六本」 [「千葉県果樹の歩み」,塚本学/日本の果物受容史 110]。</p>
<p>明治 12(1879)年 ホワイトゼノア ビオレードーフィン</p>	<p>・明治 12 年、神奈川県川崎では「ホワイトゼノア」が栽培されていた。大正時代に入り工業化するに及んで、桃・梨に代わって無花果が増殖された。大正 8-9 年頃から(無花果が)増加し、同 12-13 年から昭和にかけて 70 畝になった。明治 12 年、ホワイトゼノアが入ったが、果実小さく品質悪く増えなかった。大正 8-9 年に「ドーフィン」が入り、昭和初期(昭和 7~8 年)までは「ビオレードーフィン」が全盛で、10 畝当たり 500-600 円の収入があった [神奈川県園芸発達史/富樫常治記/果樹農業発達史 14]。</p>
<p>明治 17(1884)年</p>	<p>・[明治 17 年刊,三田育種場:舶来果樹要覧]によると、【漿果類】ブドウ 100 品種・イチジク 4・キイチゴ 1・クロイチゴ 1・スグリ 2・フサスグリ 2・イチゴ 7。【仁果類】リンゴ 108・ナシ 126・マルメロ 3・メドラー 1・オレンジ 1・レモン 1・シトロン 2・ザクロ 1。【核果類】オウトウ 31・モモ 17・油桃 6・アンズ 19・スモモ 8・オリーブ 1。【乾果類】ハシバミ 2・クルミ 1・アーモンド 1[果樹農業発達史 14]。(注)三田育種場とは、明治 7(1874)年、内務省勸業寮は、三田四国町(現在の港区芝 3 丁目の大部分と芝 5 丁目北側、芝 2・4 丁目西側あたり)の薩摩藩邸跡地を買い取り、内藤新宿勸業寮附属試験場にした。明治 10(1877)年 6 月、三田培養地と改称、さらに同年 8 月三田育種場と名を変更した[Wikipedia/三田育種場]。「メドラー」は <i>Mespilus germanica</i>。セイヨウカリンともいう。バラ目バラ科セイヨウカリン属に属す。果実をゼリーの原料などに用いる[栄養・生化学辞典]・セイヨウカリン(西洋花梨、<i>Mespilus germanica</i>)は、南西アジアまたは南東ヨーロッパ原産の落葉性低木で果樹として利用される。英語名はメドラー(<i>medlar</i> または <i>common medlar</i>)。かつてはセイヨウカリン属の唯一の種だったが、1990(平成 2)年にアメリカ中部で第 2 の種 <i>Mespilus canescens</i>(Stern's medlar)が発見された。果実の性質がカリンに似ているためセイヨウカリンという名がついているが、カリンは単型のカリン属であり、属が異なる。またマルメロのことをセイヨウカリンと呼ぶこともあるが、マルメロも単型のマルメロ属であり別属である。見かけは寧ろビワによく似ているため、ビワを英語では"Japanese Medlar"とも呼ぶ。系統的に(<i>M. canescens</i> の次に)近いのはサンザシ属(<i>Cretaeagus</i>) である[Wikipedia/メドラー]。</p>
<p>明治 39(1906)年 害虫駆除予防規則適応</p>	<p>・(長崎県では)これまで稲を中心とした普通作物だけが(害虫駆除予防規則)の適応を受けていたが、(明治 39 年 9 月 8 日)規則改正によって、この時から果樹害虫もとりあげられるようになる。それだけに果樹が重視されてきたと云える[「長崎県果樹農業の沿革」,月川雅夫/果樹農業発達史 14]。 (注)明治政府や府県の行政もこれまでは主食の米麦を確保すればよしとし、果物は贅沢品とみて保護する施策をとらなかったのである[編者]。</p>
<p>明治 42(1909)年 榊井ドーフィン</p>	<p>・この年、広島県佐伯郡宮内村(現/廿日市市)の榊井光次郎氏が、北米加州より無花果の「ドーフィン」を輸入した。栽培、結実した結果は「ドーフィン」と異なり、果実は夏果で 150~200 ㌊、秋果は 70~100 ㌊と大きく、しかも収穫期間が長く日持ち良く、輸送に耐える等の特長があることから、同氏は農水省省園芸試験場の石原助熊氏に品種鑑定を依頼したが、「ドーフィンにあらずや」と疑問に付された。その後、榊井氏は調査をすすめた結果、「ドーフィン」ではないことを確かめたので、榊井氏の会社(榊井農園)では「榊井ドーフィン」と名付けた[石原助熊氏談/果樹園芸学上巻 33・園芸学大系無花果/梅/杏/李編 114]。(注)「榊井ドーフィン」は、平成 28 年の今も、日本のイチジクの代表品種であり、珍しく長命の品種である[編者]。</p>
<p>大正時代 (1912~1925 年) カリフォルニアから品種導入</p>	<p>・広島県佐伯郡宮内村(現/廿日市市)の榊井(光次郎)氏は大正時代にカリフォルニアから、「ブラウンターキー」・「ロイヤルビンヤード」・「サンペドロホワイト」・「カドタ」・「ビオレードーフィン」・「セレスト」・「ホワイトゼノア」・「セントジョイン」・「オズボーンプロフィック」・「ホワイトマルセイユ」・「ホワイトアドリアチック」・「カルフォルニアブラック」・「ブラウンスウィック」・「ブラックイスキア」等々、多くの品種を輸入したが、「榊井ドーフィン」は日本の無花果の主力品種として普及した[果樹園芸学上巻]。(注)昭和 28(1953)年頃、農林省農業技術研究所園芸部(園芸試験場の後身で当時、神奈川県中郡大野町)のイチジク品種保存園には上記品種は全て揃っていた[編者]。</p>

